

哲学の言葉 — ヘーゲルの「精神」について —  
The Words of Philosophy  
— The Structure of Hegel's "Geist"—

満井裕子

Yuko MITSUI

要旨

ヘーゲルの哲学は認識論に分類される。認識論哲学はデカルトが、彼の有名なテーゼ「我、惟う。故に、我、在り」によって、哲学的思考の基盤を思惟の主体としての「私」に置いたことに始まる。この「私」は、デカルトによれば、我々の悟性が成立する場としての「私」であって、我々が日常的に使う、他の誰でもない、個別のこの自分としての存在を意味する《私》とは異なる。『精神現象学』の中で、ヘーゲルは哲学的主体としての「私」を、「精神」の形態における「意識」として、デカルトよりも、より精緻な形で定義している。本稿では、『精神現象学』の「(BB) 精神の章」の冒頭部分を取り上げ、解釈を行うことによって、ヘーゲルが哲学的主体としての「私」をどのように定義しているのか詳細にみて行く。

この論稿の本題は「哲学の言葉」である。ところで読者の方々は「哲学の言葉」に何を想像なさるだろうか。筆者の予測ではその想像は大きく分けて、二つのものに集約できるのではないかと思う。一つは「言葉」という語に注目する場合で、この場合には一般の言葉とは別に、哲学のための特別な言葉が存在すると考える考え方であり、哲学の専門用語のようなものが存在すると考える在り方である。その場合、読者はこの論稿を、副題とも絡め合わせて、ヘーゲルの哲学用語を解釈する論文、即ち文献学的な分析を行う論文として想像されることと思われる。もう一つは「哲学」に注目する場合で、「哲学」を主に世界観、或いは広義の人生観として捉え、その基本的な思想から出てくる教訓という意味で「哲学の言葉」を想像する場合である。この場合には読者は本稿を、ヘーゲル哲学の内容についての解釈として捉え、最後に筆者がヘーゲル哲学から読み取った内容を提示する論文として想像なさるだろう。しかし筆者が此処で展開したいと考えている「哲学の言葉」は、厳密な意味において、二つの何れと

も異なる。

それでは、この論稿はどのような点において、以上の二つの在り方と異なるのか。筆者は本稿でヘーゲルの『精神現象学』の「精神」の冒頭の解釈を行うが、しかしこの解釈に際して、ヘーゲルの用語を説明するための二次的な文献は一切使用されない。此処では、あくまでもヘーゲルの言葉をヘーゲルの論理に沿って解釈することが試みられる。一般にヘーゲルの『精神現象学』は難解な文章として知られている。ヘーゲルを読む場合、しかし読み手は、この難解さが文章の難解さであるのか、それともヘーゲルが自らの課題として立てている思考の事柄が複雑で困難な故に難解なものとなっているのかを区別しなければならない。前者の場合は、見かけの割には内容のないものとなるであろう。この場合には用語の平易な説明が求められ、二次的文献の補強による説明が必要となる。しかし後者の場合には、読者はヘーゲルが展開する論理に辛抱強く付いて行くことが求められる。そしてヘーゲルの思考が理解できるようになると、ヘーゲルの叙述が極めて適確に内容を捉え、これ以外の表現では彼の思考の対象となっている事柄を表現できないことに気付く。筆者は後者の立場に立つ。

次に、本稿の目的は、ヘーゲルの哲学を自らの興味・関心から捉え直し、現代の我々にも教訓となるような新しい観点を読み取ることにあるのではない。此処では、あくまでもヘーゲルの思考の過程を理解することに重点を置く。なぜなら本稿は、近世哲学の特徴である「認識論」という思考を理解することに目的を置くからである。ヘーゲルの哲学は一般に「思弁哲学」という定義で知られているが、「思弁」は、また「推論」とも言い換えることができる。この「思弁」という「思考」は、現代の我々が日常的に行う思考および学術的に行う分析的思考と似て非なるものである。そのため二つの思考は、区別されなければならない。

以上のような観点から、本稿では『精神現象学』の中から、「精神の章」の冒頭部分が取り上げられる。(BB) という記号の付された「(BB) 精神の章」は、「A 意識の章」、「B 自己意識の章」、「C (AA) 理性の章」の三つの章の後に位置する。『精神現象学』は人間の「意識」が哲学的な思考を理解できる「精神」へと高まってゆく教養の過程を叙述したものであり、その叙述は、最も初期の段階である「A 意識の章」の「感覚的確信」から始まる。しかし我々はこの開始点が意識の生成の観点からみた開始点であって、人間の哲学的思考の基盤となる「意識」の最初の出発点ではないことに注意する必要がある。それでは、哲学的思考の基盤となる「意識」の開始点はどこであるのか。

ヘーゲルの哲学は、西洋哲学史の流れの中でみれば、近世哲学の最後に、即ち「認識論」の流れの最後に、「認識論」の完成体として位置する。近世哲学の特徴である「認識論」はデカルトのコギト、即ち「我、惟う。故に我あり」の「我」に哲学的思考の基盤を置いたことから始まるが、デカルトの「我」または「私」は、我々の個人

的な主観としての《私》ではなく、全ての人間に共通の「悟性」が成立する場所としての意識を意味した。ヘーゲルは、この哲学的主体としての「私」、言い換えると「自己」を、デカルトよりも、より高次の「意識」の形式において、捉え直す。

ヘーゲルの「意識」は、主体と対象との二つの側面から構成された一つの形態として、ヘーゲルの言葉を使えば、「対自存在」と「即自存在」との二つの側面から構成された「単一体」として規定されている。つまり「意識」は一つの単一体として存在するが、この単一体は主体（対自存在）と対象（即自存在）とから構成されている。デカルトの「私」が「思惟」という存在であったように、ヘーゲルの「意識」も「思惟」である。ヘーゲルは、しかし「思惟」を「認識」として、或いは「反省」として、デカルトよりも、より精緻な形で規定し直す。

ところで認識という行為、或いは反省という行為は、認識する主体と認識される客体との二つの側面から成立するが、我々が一般に認識という行為を思い浮かべる場合、我々は認識の行為を、主体の側が客体に対して一方的に行う行為として考える。この場合、客体である対象は我々の意識の外側に存在していることになる。ヘーゲルを読む場合、我々は、我々のもつ、このような常識から「認識」を、或いは「反省」をイメージすることはできない。なぜならヘーゲルの「意識」を構成する対象は、我々の意識の外側に存在している対象ではなく、「意識」が自らの反省運動によって獲得した「即自存在」だからである。即ち、「即自存在」とは「意識」が自らの反省運動によって自己の内に措定した「知」なのである。

「意識」は一連の反省運動を担う基体として単一体として存在する。しかし同時に、この単一体は、それ自体が反省の運動であり、主体と対象との二つの要素から、ヘーゲルの言葉を使えば、二つの「契機」から、構成されている。「意識」が主体の契機に従って反省を行えば「対自的」とよばれ、対象の契機に従って反省を行えば、「即自的」とよばれる。

以上のような構成をもつ「意識」は、「(BB) 精神章」の以前に登場する「A 意識」・「B 自己意識」・「C (AA) 理性」という形態においては、哲学的思考の基盤としての「私」であることはできない。「精神」という形態において初めて、「意識」は哲学的思考の基盤として登場してくる。それは何故か。我々はこの点について、以下にヘーゲルの論理を辿って行くことにしよう。

ヘーゲルは「精神」を最初に次のように規定している。

Die Vernunft ist Geist, indem die Gewissheit, alle Realitaet zu seyn, zur Wahrheit erhoben, und sie sich ihrer selbst als ihrer Welt, und der Welt als ihrer selbst bewusst ist. - Das Werden des Geistes zeigte die unmittelbar vorhergehende Bewegung auf, worin der Gegenstand des Bewusstseyns, die reine Kategorie, zum

Begriffe der Vernunft sich erhob. (S. 238, Z.3-7)

(訳) 全てが現実だという確信が真理へと高まり、現実に対するこの確信が、自己を「世界」として理解し、また「世界」を自己として理解した時、理性は「精神」となる。これまでの先行した「意識の運動」が、「精神」の生成の過程を示しているが、この運動の中で、「意識」の対象は、言い換えると、純粋なカテゴリーは、「理性」の諸概念へと高まったのであった。

「精神」の形態に到達する以前に、「意識」は「A 意識」の形態において、外的に存在する対象の存在を知として獲得し、「B 自己意識」の形態においては、個体としての自己の存在を知として獲得した。そして「C (AA) 理性」の形態において「意識」は対象がカテゴリーであることを知るようになったが、カテゴリーを単に即自存在としてだけでなく、対自存在としても捉えることができるようになった時、「意識」は理性の形態から「精神」の形態へと高まる。「精神」として「意識」は今や「世界」というカテゴリーを自らの対象にもつ。「意識」は「世界」を対象とすることによって、一つの世界観を自己の内に獲得している。

「精神」が今までの意識の諸形態と異なる点は、これまでの「意識」の主体が基本的に個体として、個別の外的カテゴリーを対象にもつ存在であったのに対して、「精神」としての「意識」は一つの精神的な対象を知の対象としてもつという点にある。

ヘーゲルは以上のように「精神としての意識」を最初に規定した後に、これまでの反省の運動を振り返る。

In der beobachtenden Vernunft ist diese reine Einheit des Ich und des Seyns, des Fuersich und des Ansichseyns, als das Ansich oder als Seyn bestimmt, und das Bewusstseyn der Vernunft findet sie. Aber die Wahrheit des Beobachtens ist vielmehr das Aufheben dieses unmittelbaren findenden Instinkts, dieses bewusstlosn Daseyns derselben. Die angeschaute Kategorie, das gefundne Ding tritt in das Bewusstseyn als das Fuersichseyn des Ich, welches sich nun im gegenstaendlichen Wesen als das Selbst weiss. Aber diese Bestimmung der Kategorie, als des Fuersichseyns entgegengesetzt dem Ansichseyn, ist ebenso einseitig und ein sich selbst aufhebendes Moment. (Z.7-16)

(訳) 「観察する理性」においては、「自己」と「存在」との純粋な単一体は、言い換えると、「対自」と「即自存在」との純粋な単一体は、「即自」として、或いは「存在」として規定されていた。そして理性としての「意識」は、この単一体を（即ち「即自」を、或いは「存在」を）見出した。しかし観察するという行為の真理は、むしろ、この直接的に（対象を）見出す本能を、この本能の無意識的な定在を、廃棄することなのである。直観されたカテゴリーは、言い換えると、「物」として見出された対象は「自己」の対自存在として意識の内に現れる。この対自存在という意識は、今、対象

の本質として存在している「自己」を自己として知っている。しかしカテゴリーのこのような規定、即ち、即自存在と対立する形での対自存在という規定は、即自存在と同じように一面的なものであり、止揚される契機である。

C (AA) という記号の振られた「C. (AA) 理性の章」は、「A 観察する理性 Beobachtende Vernunft」と「B 理性的な自己意識が行う自己による現実化 Die Verwirklichung des vernuenftigen Selbstbewusstseins durch sich selbst」とのA、Bから構成されている。そのため上記の引用文中の「観察する理性」はAのことを指す。Aという記号が示すように、「観察する理性」は、「理性」であっても感覚や知覚の要素をもつ悟性的理性である。「観察する理性」の行う反省は「観察する」という行為であり、これは対象を「存在」として直接的に捉え、分析を行う広義の直観的能力である。この理性の対象、即ち「存在」は、「観察する理性」によって「物」というカテゴリーとして捉えられる。

ヘーゲルは、此处で、「意識」の反省運動の基本的な形式である「止揚（廃棄） das Aufheben」の観点から、これまでの経過を振り返る。「観察する理性」の形態にある意識は、「自己」と「存在」との単一体、或いは、「対自」と「即自存在」との単一体である。しかし「観察する理性」として「意識」は、この単一体を最初は「即自」として捉えている。そのため「観察する理性」は、「外的存在」を反省の対象にもち、この「存在」を、最終的に「物」というカテゴリーとして捉える。しかしこの「物」という「即自存在」が、カテゴリーとして自己の内に存在する対象であることを知った時、意識は「A 観察する理性」の段階を脱し、「B 理性的な自己意識」の形態へと移る。Bの自己意識の形態は、しかし、Aが対象を全て外的存在として分析するという一面性であるのと同じように、対象を全て自己の観点から利己的に認識するという一面性である。そのためBの一面性は、Aの一面性と同様、「意識」によって認識の一契機（反省運動の一契機）として止揚され、「自己」の内に取り込まれる。

Die Kategorie wird daher fuer das Bewusstseyn bestimmt, wie sie in ihrer allgemeinen Wahrheit ist, als an und fuersichseyendes Wesen. Diese noch abstracte Bestimmung, welche die Sache selbst ausmacht, ist erst das geistige Wesen, und sein Bewusstseyn ein formales Wissen von ihm, das sich mit mancherley Inhalt desselben herumtreibt; es ist von der Substanz in der That noch als ein einzelnes unterschieden, gibt entweder willkuehrliche Gesetze, oder meynt die Gesetze, wie sie an und fuer sich sind, in seinem Wissen als solchem zu haben; und haelt sich fuer die beurtheilende Macht derselben. – Oder von der Seite der Substanz betrachtet, so ist diese das an und fuersichseyende geistige Wesen, welches noch nicht Bewusstseyn seiner selbst ist. – Das an und fuersichseyende Wesen aber, welches sich zugleich als Bewusstseyn wirklich und sich selbst vorstellt, ist der Geist. (Z. 16-27)

(訳) カテゴリーは、従って、意識に対してカテゴリーが普遍的な真理という形で存在するように、「即かつ対自的本質」として規定される。即かつ対自的本質という、この、事柄そのものをまだ抽象的な形でしか構成していない規定は、最初は精神的な本質として存在している。そして、これに対する意識は、多様な内容と関りをもつ本質についての知として存在する。意識は、実際、「実体」という観点から、尚も個別態として区別されており、恣意的な律法を与えるか、或いは、即かつ対自的に存在している律法を自分の知の内にあるものとして捉え、自分のことを、律法を判断する力と思い込む。或いは、「実体」という側面からみれば、この「実体」は即かつ対自的に存在する、精神的な本質であって、これは、まだこの本質の「意識」となっていない。しかし、自分自身を「意識」として現実的なものとみなすと同時に、自分自身としてもみなす、このような「即かつ対自的な本質」が「精神」なのである。

此処では、上述のA、Bの止揚の結果、登場してきた「精神」の最初の状態について、即ち「精神」の「即自存在」の状態について、語られている。「精神」の対象は、カテゴリーであるが、このカテゴリーは、もはや「物」ではなく、「本質」という精神的なカテゴリーである。そして「物」が「存在」という在り方をしたのに対して、「本質」は「実体」という形で存在する。「本質」は、しかしまだ登場してきたばかりで、「本質」の実体が「意識」の確信にまでは至っていない。そのため「即かつ対自的に存在する本質」として、抽象的な実体として、即ち「律法」として存在している。対象が普遍的な、即ち多様な解釈を許す抽象的な律法であるように、「精神」の主体の方も、《私》という個別の存在であり、自分のことを、立法の内容を判断し、それを行使する力として認識している。そのため「精神」の形態にある「意識」は、自己を「意識」として普遍的な存在であると理解する一方で、言い換えると「即かつ対自的な本質」を知として知っている一方で、この「本質」の内容に関しては我流の判断を下す個別で主観的な自己に留まっている。

Sein geistiges Wesen ist schon als die sittliche Substanz bezeichnet worden; der Geist aber ist die sittliche Wirklichkeit. Er ist das Selbst des wirklichen Bewusstseyns, dem er oder vielmehr das sich als gegenstaendliche wirkliche Welt gegenuebertritt, welche aber ebenso fuer das Selbst alle Bedeutung eines Fremden, so wie das Selbst alle Bedeutung eines von ihr getrennten, abhaengigen oder unabhaengigen Fuersichseyns verloren hat. Die Substanz und das allgemeine, sichselbstgleiche, bleibende Wesen, - ist er der unverrueckte und unaufgeloeeste Grund und Ausgangspunkt des Thuns Aller, - und ihr Zweck und Ziel, als das gedachte Ansich aller Selbstbewusstseyn. - Diese Substanz ist ebenso das allgemeine Werk, das sich durch das Thun Aller und Jeder als ihre Einheit und Gleichheit erzeugt, denn sie ist das Fuersichseyn, das Selbst, das Thun. (S.238, Z.28 - S.239, Z.7)

(訳) 「精神」の精神的な本質は、既に「倫理的な実体」として特徴づけられている。しかし「精神」は倫理的な現実性である。「精神」は現実的な意識の「自己」であり、意識に対しては、「精神」はむしろ対象として現実的に存在する世界として立ち現れてくる。この「世界」は、しかし、自己にとって疎遠なものとしての意味を全くもっていないが、それと同じように、自己の方も、世界から切り離された形で存在する全ての対自存在という在り方をもはやしない。実体であり、普遍的で、常に同じものであり続ける本質としては、「精神」は決して揺らぐことのない「根拠」であり、全ての者の行為の出発点である。そして全ての自己意識の思考された「即自」としては、「精神」は目的であり、目標である。この実体は、同様に、全ての者の行為によって、彼らの単一体として、彼らの同等性として生じてきた普遍的な作品なのである。というのも、この実体は「対自存在」であり、「自己」であり、「行為」であるのだから。

「精神」の単一体を構成する主体と対象とを、より詳細に検討すると、両者はそれぞれが二重の構造をもっていることがわかる。「精神」の主体は、個別的な《私》であると同時に、普遍的で倫理的な、全ての意識に共通する「私」でもある。また「精神」の対象も、万人が守るべき法として、普遍体として、個別の意識に対立的に存在する一方で、倫理性という、精神的な性質の故に、意識の外側に存在する対象ではもはやなく、一つの世界観として意識の内に実体として存在している。「精神」を反省の運動という点からみれば、「精神」は普遍的本質として、倫理的認識が出発する、万人に共通の「根拠」であると同時に、その実現が目指される「目標・目的」でもある。

「精神」の倫理的本質が実体として個別の意識の内に存在すると同時に、一つの世界観として全ての個別の意識に共有されるようになった時、「精神」は「世界」という万人の共同作品として、現実中存在することになる。倫理的な世界観は、この意味において、全ての個別意識が共同で作り出す一つの作品であり、それは共同の普遍的な「自己」であり、「精神」の「対自存在」なのである。

Als die Substanz ist der Geist die unwankende gerechte Sichselbstgleichheit; aber als Fuersichseyn ist sie das aufgeloeeste, das sich aufopfernde guetige Wesen, an dem Jeder sein eignes Werk vollbringt, das allgemeine Seyn zerreisst und sich seinen Theil davon nimmt. Diese Aufloesung und Vereinzlung des Wesens ist eben das Moment des Thuns und Selbsts Aller; es ist die Bewegung und Seele der Substanz, und das bewirkte allgemeine Wesen. Gerade darin dass sie das im Selbst aufgeloeeste Seyn ist, ist sie nicht das todte Wesen, sondern wirklich und lebendig. (Z.7 - 14)

(訳) 実体として「精神」は揺らぐことのない公正な自己同等性であるが、「対自存在」としては、実体は個別に拡散した、自己犠牲的な精神をもった善良な本質である。そして各人は、この善良な本質に基づいて、自分の行為を完遂し、普遍的な存在を分裂

させ、そこから自分の取り分をとる。本質がこのように分裂し個別化した状態こそ、「万人の行為と万人の自己」を構成する契機なのである。この契機は、実体の運動であり、実体の魂であり、普遍的な本質が行動へと移されたものである。正に、実体が「自己」において個別化した存在であるということの内に、実体は、死せる本質ではなく、現実的で生きた本質として存在する。

「精神」は万人に共通の「自己」として一つの倫理的な世界として存在している。そして「即自存在」として、即ち、人間の善良な本質として、「精神」は自己同等性である。この自己同等性を共有する個別の意識は、しかし、この即自的な本質を「対自存在」として反省し、これを行動に移す。そのため「精神」の自己同等性は多様性へと分裂し、個別的な意識は、それぞれが、普遍的な本質を具体化する契機として存在する。このような「精神」の即かつ対自的な在り方を、ヘーゲルは「現実的で生きた本質」とよぶのである。

Der Geist ist hiemit das sich selbsttragende absolute reale Wesen. Alle bisherigen Gestalten des Bewusstseyns sind Abstractionen desselben; sie sind diss, dass er sich analysirt, seine Momente unterscheidet, und bey einzelnen verweilt. Diss Isoliren solcher Momente hat ihn selbst zur Voraussetzung und zum Bestehen, oder es existirt nur in ihm, der die Existenz ist. Sie haben so isolirt den Schein, als ob sie als solche waeren; aber wie sie nur Momente oder verschwindende Groessen sind, zeigte ihre Fortwaetzung und Rueckgang in ihren Grund und Wesen; und diss Wesen eben ist diese Bewegung und Aufloesung dieser Momente. (Z.15 - 23)

(訳)「精神」は、これによって、自己を孕んだ、絶対的な、現実的な本質である。「精神」よりも先に存在した意識の諸形態は、何れも、「精神」の抽象形態である。それらは、「精神」が自己を分析し、「精神」の諸契機を区別し、個々の諸契機の許に留まった場合の諸形態なのである。このように諸契機を個別化させて存在することができるということ自体が、「精神」の存在を前提している。或いは、言い換えると、個々の契機は、「精神」が存在するが故に、「精神」において、存在し得るのである。「精神」の抽象形態は、それらの形態があたかも真に存在するような仮象を与えるが、それらが諸契機にすぎず、消失する存在にすぎないことは、これらの抽象形態がその根拠の内に、その本質の内に、還帰してしまうことによって示されている。そして、この本質は、正に、これらの諸契機の解消の運動として存在するのである。

我々はヘーゲルが「意識」の諸形態の最も基本的な形態として「精神」を前提としていることに注目しなければならない。「精神」が登場する以前の諸形態（意識・自己意識・理性）は、ヘーゲルによれば、「精神」の諸契機であって、それらは全て「精神」が行う反省運動として「精神」の内に吸収される。意識や自己意識や理性が、あたかもそれだけで存在するように見えるのは仮象であって、それらは個別の存在とし



ては存在することができず、「精神」という基盤が存在するが故に、それらは存在することができるのである。これらの諸形態は、従って、本来の哲学的主体としての「私」という出発点ではない。これらの三つの形態は、むしろ意識の認識運動である反省の機能を説明するものであるため、「意識」を構成する諸契機なのである。

Hier, wo der Geist, oder die Reflexion derselben in sich selbst gesetzt ist, kann unsre Reflexion an sie nach dieser Seite kurz erinnern ; sie waren Bewusstseyn, Selbstbewusstseyn und Vernunft. Der Geist ist also Bewusstseyn ueberhaupt, was sinnliche Gewissheit, Wahrnehmen und den Verstand in sich begreift, insofern er in der Analyse seiner selbst, das Moment festhaelt, dass er sich gegenstaendliche, seyende Wirklichkeit ist, und davon abstrahirt, dass diese Wirklichkeit sein eignes Fuersichseyn ist. Haelt er im Gegentheile das andere Moment der Analyse fest, dass sein Gegenstand sein Fuersichseyn ist, so ist er Selbstbewusstseyn. Aber als unmittelbares Bewusstseyn des an und fuersichseyns, als Einheit des Bewusstseyns und des Selbstbewusstseyns ist er das Bewusstseyn, das Vernunft hat, das, wie das Haben es bezeichnet, den Gegenstand hat als an sich vernuenftig bestimmt, oder vom Werthe der Kategorie, aber so, dass er noch fuer das Bewusstseyn desselben den Werth der Kategorie nicht hat. Er ist das Bewusstseyn, aus dessen Betrachtung wir so eben herkommen. Diese Vernunft, die er hat, endlich als eine solche von ihm angeschaut, die Vernunft ist, oder die Vernunft, die in ihm wirklich und die seine Welt ist, so ist er in seiner Wahrheit; er ist der Geist, er ist das wirkliche sittliche Wesen. (Z.23 - 39)

(訳)「精神」が、言い換えると、諸契機の解消という反省の運動が、自己自身の内へと措定された所で、我々がこれまでに行ってきた諸契機についての反省を、反省の運動という側面から、簡単に想起してみることにしよう。「精神」が自分自身の分析を行い、自分の前に対象として存在する現実性の契機に集中し、この現実性が自分に固有の対自存在であることを抽出する間は、「精神」は意識一般として、即ち、感覚的確信・知覚・悟性を自己の内に有する意識として、存在する。これとは反対に、自分の対象が対自存在であるという、分析のもう一つの契機に集中する場合には、「精神」は自己意識として存在する。しかし即かつ対自存在という直接的な意識としては、言い換えると、意識と自己意識との単一体としては、「精神」は「理性を所有する意識」であり、所有という性質が理性の意識を特徴づけているように、この意識は対象をもち、この対象を「即自的で理性的な対象」として規定している。或いは、カテゴリーの価値という観点からみれば、「精神」は対象についての意識という側面においては、カテゴリーの価値を、まだ、もっていない。「精神」は意識であるが、この意識の観察から我々は今、やっと抜け出てきたのである。「精神」が所有している理性として、「精神」

によって「理性」として直観された理性として、或いは「精神」において現実的に存在し、「精神的世界」として存在する理性として、「精神」は自らの真理の内在する。「精神」は「精神」として存在し、「精神」の対象は現実に存在する倫理的本質なのである。

ヘーゲルが哲学的主体として規定した「精神」としての「意識」、即ち「私」が、一般的な意識と異なる点は、「倫理的本質」として存在する点にある。「精神」は感覚的確信も知覚も理性も、また自己意識の機能をも、反省の諸契機として自己の内にもつ。これらの諸契機は、対象の観点から区別された反省の諸機能なのである。しかし反省の主体である意識がこれらの機能のみから構成されているのであれば、それは主観的で個別的な《私》でしかない。《私》のもつ理性は、自己の目的に合わせた利用の観点から、対象をカテゴリーとして分析する。しかし、これらのカテゴリーを使用する際に生じる倫理的な価値について知ることがない。意識は「精神」という形態において初めて、「自己」の本質的な規定性である倫理性を獲得する。哲学的主体として存在する「意識」は、自分と同じように一個の認識の主体として存在している他の「意識」と共に、個体を越えて存在する一つの倫理的な「世界」を創出する。そして、この共通の「世界」は個別の意識の内では、普遍的で倫理的な共通の「自己」として存在する。「精神」としての「意識」は、自己の行為において、「自己」を自己に優先させるべきことを知っている。自己の内において「自己」を自己から区別し、自己を「自己」に服従させる、この能力が「理性」とよばれる反省の能力であり、これを持つことによって初めて、意識は哲学的主体である「私」として存在し得ると、ヘーゲルは言うのである。我々は、ヘーゲルの「意識」を理解するに当って、ヘーゲルが「理性」を理性から区別していることにも充分注意を向けておく必要がある。

## 使用テキスト

Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Phaenomenologie des Geistes*, Gesammelte Werke, Bd.9, Hamburg, 1980

## 参考文献

Heribert Boeder, *Topologie der Metaphysik*, Muenchen, 1980

## **Abstract**

Descartes began a new era of philosophy with his famous sentence: “I am thinking, therefore I am”. He set the “I”, the human consciousness, as the philosophical basis in which a human mind can exist. Hegel stood in this tradition too, but he defined the “I” as the subject of recognition, namely, *Geist*, more elaborately. In this paper a detailed explanation about the structure of the *Geist* through analyses of the first 3 long paragraphs of the chapter (BB) Spirit in the “Phenomenology of Spirit” is given.